

介護等体験報告

-実習を通して学んだこと-

牛山詢也（人文学部日本伝統文化学科2年）

介護等体験実習での内容と実習を通して学んだことを報告する。

児童発達支援センターでの主な活動内容は子供の手伝いだった。一人では上手く動くことの出来ない子供の補助をメインに行なった。例えば、出欠確認でシールを貼る作業を生徒が行うが、そのときにシールをうまくはがせない子供の補助として途中までシールをはがしたりした。そこから先、シールをはがし、貼る作業は子供たちが行うなど、あくまで補助で、私が全て行なったりはしない。毎朝、最初に朝の会や体操など決められた活動を行い、そのあとは日によってボールで遊んだり、遊具で遊んだりなど様々な活動を行った。その後、食事をとり午後の活動へ移る。食事は私も子供と共にとり、子供や子供の親とコミュニケーションをとるように心がけた。午後も午前中同様活動を行い、最後に帰りの会や歌を歌うなど決められた活動を行い、子供は帰宅となる。子供のお見送りも玄関まで見送り、帰るときも積極的に子供へ声をかけるようにした。その後休憩を挟み、翌日の保育準備などを行なったあと、行事のための製作を行うことが多かった。具体的には運動会のためのくす玉やゴールテープを作った。くす玉は子供が使うものであり、中にはひもをうまく掴めない子もいる。そのため、ひもの先端を輪にし、そこに手を掛けるだけでひもを引くことができるようにするなど、子供が使いやすい、子供に適した形になるように工夫した。

言葉での会話がうまくできない子もいたが、そういった子でも表情や目線の変化から何かこちらに伝えようとしていることを教わり、以前よりもそういった点を気にするようになった。コミュニケーションを取る方法は言葉での会話だけでないことも学んだ。また、様々な子供がいるため子供により出来ることに差があり、性格なども一人一人異なる。そのため、子供一人一人に適した接し方やコミュニケーション方法が求められた。その点については、最初は上手くいかず職員の方に助けをもらう場面などもあった。しかし、実習が進むにつれ、子供への理解も深まり、子供を笑顔にすることもできるようになり身についていったと思う。子供一人一人に適した接し方やコミュニケーションを行うためにはその子供自身への理解が大切であり、将来教員になった場合でも生徒一人一人をよく見て生徒の事をちゃんと理解しようと思った。

特別支援学校は「学校」とつく通り児童発達支援センターよりも教育的な面が強かったように感じた。こちらでは教員の補助がメインで、児童一人について一緒に活動する場面もあった。朝登校すると、まず着替え、その後児童一人一人異なる活動を行なう。基本的にその活動は児童が一人で行い、教員は手伝ったりはしない。児童ができる事を増やすことを目的に行なっていたため、この活動以外でも児童一人での活動は多かった。その後、朝の会を行う。その時も進行は児童が行うなど、児童メインで活動を行っていた。その後、体育館で運動を行った。運動後、教室で季節に合わせた活動を行なった。ここだけは児童一人だと難しい内容も多かったため、補助することが多かった。その後児童は給食を食べ、歯磨きなどを行なったあと、午

後の活動へ移る。午後も制作活動などを行う。活動後着替え、帰りの会を行い下校し実習は終了となる。登下校時は昇降口まで迎えや見送りへ行き、その時には自分が担当したクラス以外の児童ともあいさつを交わしたりした。着替えなど、一人でできる活動時は教員側は見守っているが、途中で他のことに興味を示したり、違う行動をとってしまう児童もおり、そこで元々行っていた活動に戻るよう促したりした。また、そのような状況でも、違う行動へ移ってしまってもそちらが終われば自分で元々行っていた活動に戻る児童もいれば、いつまでも違う行動をとり続ける児童がいた。そのような児童の特徴、違いを見極めてコミュニケーションをとるよう心がけた。

今回の実習を通して、以前よりも相手に応じたコミュニケーションをとれるようになったと思う。